資　料

学科イベント「大きくなーれ　友だちの輪」の変遷とその意義について

高尾　兼利

（佐賀短期大学生活福祉学科）

（平成17年12月14日受理）

The History and Significance of Department Event , "Let' s Make More Friends Around You"

Takao KANETOSHI

(Saga Junior College)

(Accepted December 14, 2005)

An Abstract

I have described the brief history of our department's annual event, "Let's Make More Friends Around You," and given some reflection upon its significance. The summary is as follows:

1. The Brief History of the Event
   1) Duration
   2) Participants
   3) Programs
   4) Others
   5) Summaries
2. The Significance of the Event
   1) Purposes of the event
   2) Comments, Opinions and Reflections from the Participants
      ① Comments from the participants who have found various sorts of significance in the event
      ② Comments from the participants who have obtained a sense of fulfillment through the event
      ③ Comments from the participants who have been determined to get jobs as welfare posts
      ④ Discovering new viewpoints
      ⑤ Deeper understandings for the physically challenged
      ⑥ Comments from the senior students, who have organized the event
      ⑦ Comments from the participants who have obtained a sense of fulfillment through playing their own individual roles
      ⑧ Deeper self-recognitions
      ⑨ Comments from the participants who have been impressed by the pr -ograms of the event

Key words: History of Event　イベントの変遷
Significance of Event　イベントの意義

1．はじめに

佐賀短期大学では、単位取得につなげない学科イベントを開学以来開催してきている。食物栄養学科の「ケーキ大会」「おせちサラダ大会」、幼児教育学科の「音楽会」（現在では、「幼児教育学科卒業研究発表会（実技の部）に変更され、単位取得につながる発表会になっている）がその代表である。これらのイベントはすでに伝統になっており、その意義は本学の中で言外に確立されたものとなっている。一方「大きくなーれ　友だちの輪」は、始められて数年である。その意義も確立の渦中にあると言っても、過言ではない。始原の資料も現存しており、5回目を開催した現在では、踏襲すべき内容も確立されたと思われる。今回、このイベントの概要を記述し、変遷とその意義を考察することにした。

1．変　　遷

学科イベント「大きくなーれ　友だちの輪」は、佐賀短期大学生活福祉学科が主体となり、2001（平成13）年9月29日に第1回を開催し、年間に1度、2005（平成17）年まで連続5回開催している。この間、プログラム等に変更が加えられている。以下変遷を、「開催時期と会場」「参加者」「プログラム内容」「報告書（「大きくなーれ　友だちの輪」通信）」に分けて記述する。

1）開催時期について

開催時期と場所は下記の通りである。第1回は「2001年9月29日、土曜日、10時から13時30分まで、第1学生ホール」、第2回は「2002年10月19日、土曜日、10時から14時45分まで、体育館」、第3回は「2003年10月18日、土曜日、10時から15時まで、体育館及び第1学生ホール、第2学生ホール、４１１教室、４１２教室」、第4回は「2004年10月16日、土曜日、10時から15時まで、体育館及び第1学生ホール、第2学生ホール、４１１教室、４１２教室、４１３教室」、第5回は「2005年10月15日、土曜日、10時から15時まで、体育館及び第1学生ホール、第2学生ホール、４１１教室、４１２教室、４１３教室」となっている。

開催時期と会場については、第1回が2回から5回までとは大きく異なっている。この違いは、本学の夏期休暇と定期試験の時期が変更されたこと、プログラムの内容、本学学生の参加者の違いが、影響しているものと思われる。

2）参加者について

第1回の参加者は、地域の障害者15名程度、生活福祉学科学生30名程度、同教員13名、ボランティア10名程度となっている。総勢は70名前後となっている。第2回と第3回は、障害者の参加が50名程度（2回目：レインボーハウス、長光園、響、めぐみ園、まごころ授産所、みのり作業所、3回目：レインボーハウス、響、かささぎの里、あさひ荘）、高校生が100名程度（2回目：佐賀北高等学校吹奏楽部、佐賀工業高等学校、高志館高等学校、塩田工業高等学校、北陵高等学校、神埼清明高等学校、龍谷高等学校、3回目：佐賀北高等学校吹奏楽部、佐賀工業高等学校、高志館高等学校、佐賀学園高等学校、佐賀商業高等学校）、生活福祉学科学生が150名、これに教員が10名前後参加している。総勢は300名を超えている。第4回では、これに専攻科福祉専攻の学生15名とエルダーカレッジ生20名が加わった。参加した障害者は、みのり作業所、スペシャルオリンピックス、ハル、響、めぐみ園、かささぎの里、高等学校は佐賀北高等学校吹奏楽部及びJRC部、佐賀工業高等学校、高志館高等学校、佐賀学園高等学校、牛津高等学校、神埼清明高等学校であった。総勢は350名前後に達することとなった。第5回では、エルダーカレッジ生の参加は見送られた。専攻科の学生が25名と増えたため、総勢は340名前後となった。参加した障害者は、みのり作業所、スペシャルオリンピックス、響、かささぎの里、ひかり、であった。高等学校は佐賀北高等学校吹奏楽部及びJRC部、高志館高等学校、神埼清明高等学校、北陵高等学校であった。障害者と高校生の人数が「程度」となるのは、参加予定と実参加が当日の事情等で一致しないことと、参加受付時に氏名等の記載などを求めないために人数が確定できないことによる。

1回目と2回目以降の参加者の変化が目立つ。生活福祉学科の学生の一部参加から全員参加への変更、障害者の参加の呼びかけを、一つの施設の利用者から、作業所、授産所、複数の施設の利用者に広げたこと、高等学校の生徒に参加を促したことが、主な変化といえる。こうした参加者の変化はプログラム内容と密接に結びついている。また、参加する障害者の変化は、当日に障害者が参加する別のイベントが開催されたことが影響している。高等学校の参加の変化は、JRC部の変化が影響していると思われる。

3）プログラムについて

第1学生ホールで催された第1回目のプログラムは、開催順番により紹介する（以下同様）と次の通りである。「開会挨拶（生活福祉学科長）」、「講話（長光園入所者、A氏）」「レクリエーション（生活福祉学科学生）」「器楽演奏（地域ボランティア演奏家）」「食事とレクリエーション（参加者全員）」「閉会挨拶（学生代表）」となっている。体育館で開催された第2回目は、「開会セレモニー（生活福祉学科学生企画運営）」「開会挨拶（学長）」「施設・高等学校の紹介①（参加した障害者、高校生）」「大

玉運び競争（参加者全員、生活福祉学科学生の企画運営）」「器楽演奏（佐賀北高等学校生徒）」「輪になって踊ろう（参加者全員、生活福祉学科学生の企画運営）」「昼食」「施設・高等学校の紹介②（参加した障害者、高校生）」「器楽合奏（佐賀北高等学校吹奏楽部）」「手話・四季の歌（生活福祉学科学生）」「フォークダンス・オクラホマミキサー（参加者全員、生活福祉学科学生企画運営）」「閉会セレモニー（生活福祉学科学生企画運営）」となっている。

2回目は、第1回とはかなり異なるプログラムになっていることが分かる。学生による企画運営が増加しているのが大きな変化である。この変化は、生活福祉学科学生全員の参加を前提に、このイベントにその教育を期待したことと関連している。すなわち、学生主体の運営に切り替えることで、学生の主体性を養成しようと考えたのである。さらに主体的取り組みが、障害者との活発な交流を生み出し、相互理解を深めると考えたわけである。第2回開催のプログラムはこれ以降のプログラムの基盤となっている。

もう一つ大きな変化は、佐賀北高等学校吹奏楽部の器楽合奏の登場である。一般的には、高等学校の吹奏楽部は演奏会等をこれにふさわしいホール等で音楽愛好者や教育関係者向けに開催することが多い。「大きくなーれ　友だちの輪」のような、障害者との交流の場で演奏することは稀ではなかろうか。吹奏楽部の指導者が、障害者との交流の意義を評価し、これに参加することが吹奏楽部の生徒の成長につながるとの確信を得ないことには、参加につながらないと思われる。参加への始まりが本学からの依頼ではなく、同吹奏楽部からの自主的申し出によることからも、このことが窺える。

3回目は、「開会セレモニー」「作業所・施設ごとの紹介、出し物」「ゲーム・チーム対抗・力を合わせて関所破り」「高等学校ごとの紹介、出し物」「ダンス・輪になって踊ろう」「昼食とレクリエーション」「器楽合奏」「手話コーラス・世界に一つだけの花」「フォークダンス・オクラハマミキサー」「閉会セレモニー」となっている。演奏者、企画運営者は2回目開催と同一である。

3回目になって、障害者による紹介と高校生による紹介を分けている。また、2回目では、参加者全員が一堂に会して、昼食をとっていたのが、3回目では4つのグループに分かれて、学生が案出したレクリエーションを交えて昼食時間を過ごすように変更されている。この2点が主な変化である。

4回目では、プログラムの大きな流れは、3回目と同一である。開会セレモニーに「エルダーカレッジ生のコーラス」を加えたこと、フォークダンスを専攻科福祉専攻の学生が企画し、運営したことが主な変化である。また、ゲーム、手話、フォークダンスの中身は変更している。ダンスは同一のものとなっている。ゲームは「チーム対抗・栄光の架け橋」、手話コーラスは「手のひらを太陽に」「ベストフレンド」、フォークダンスは「サザエさん」となっている。

5回目は、開会セレモニーの歓迎コーラスが割愛された。車椅子フォークダンスが新しく取り入れられた。ゲームは「紙飛行機あの雲をわって」、ダンスは「フラワー」、手話は「手のひらを太陽に」「涙そうそう」、車椅子フォークダンスは「キンダーポルカ」「マツケンサンバ2」、フォークダンスは「キンダーポルカ」「ホームアニメメドレー」となっている。

4）その他

イベント終了後に「大きくなーれ　友だちの輪通信」を発刊している。参加者の参加感想を主な記事としており、毎回1000部前後を作製し、参加者やその保護者、高等学校、関係機関に配布している。この通信は、第2回目開催から現在4回目までの分が発刊されている。自主的に申し出た生活福祉学科の学生が編集に当たっている。

また、3回目開催まで、参加した障害者で成人に達した人には、昼食代として各人が300円を納めることにしていた。

5）まとめ

以上内容の変遷をまとめると次のようになる。第1回目と2回目以降とは内容が大幅に異なる。2回目開催で大きく変化を遂げ、3回目に以後踏襲される枠組みが確立され、現在に至っている。場所を学生ホールから体育館に変更し、地域の複数の障害者施設と高等学校に参加を募り、生活福祉学科全学生が運営の主体になり、高等学校の吹奏楽部が加わり、「通信」を発行したことが、大きな変化の中身である。2回目と3回目の違いは、昼食時に小グループ化したところに求められる。4回目以降では、昼食代を納めなくてすむようにしたこと、福祉専攻の学生が参加したことが主な変化である。

ただし、5回とも秋季の土曜日に開催し、参加者構成が、生活福祉学科学生と地域の障害者を主体にしているところは、変わっていない。

2．意義について

1）開催目的

第1回目開催においてその目的が明示されている。すなわち「地域の障害者をお招きして、学生との交流を図り、触れ合いを通して『障害』に対する学生の理解を深めるとともに、地域に開かれた学校としての役割を果たすことを目的」（2001年9月教授会）とした。障害者と学生の交流を図る、交流を通して「障害」に対する理解

を深める、地域に貢献する、これらの目的はプログラムが大幅に変更されても、その後受け継がれることになった。

2）参加者に体験された意義

先に紹介した「通信」に記載された感想を資料にして、参加者に体験された意義を分類、考察したい。ここでは、その対象を生活福祉学科学生に限ることにした。

①複数の意義を体験した感想の紹介

なお、感想は「通信」に記載された文章を訂正することなく、転記した。

・「大きくなーれ　友達の輪」に参加し、生活福祉学科の学生と障害のある方とゲームや歌などを歌い、一日を楽しく過ごしました。障害のある方と接するのは初めてで、会話や一緒にゲームをどのようにすれば楽しんで頂けるのか、戸惑いもありましたが、障害のある方の歌や踊りを見て、一緒に笑うこと、楽しむことで「友達の輪」が広がることを一日を一緒に過ごし分かりました。

私は直接、障害のある方と接する機会があまりなかったのですが、ゲームや歌などがあっている時に、ずっと表情を見ていました。一番、いい顔をしていた時は、自分の自己紹介をしていた時の顔だと思います。大勢の中での自己紹介だったので恥ずかしそうに、笑っていましたが、大きな声で自分の名前を言う姿はとても印象的でした。また、一生懸命に練習したとこっちにまで伝わってくる歌や踊りをしている姿はとても生き生きとしており、体のハンディなんて感じませんでした。また、その姿を見ている私たちや施設の方も、手を叩いたり一緒に口ずさんだりして、皆な、いい表情だったように思います。

しかし、残念だったこともありました。それはフォークダンスの時です。私の前は、車イスの方と職員さんだったのですが、男側と女側の位置があやふやで、フォークダンスが始まった時に前が進まず、困られていたからです。フォークダンスは歩いて進んでいくのですが、車イスは座ったままです。歌が流れ、車イスの方との番になった時、私は困りました。一緒に歩いて進むことができなかったからです。

困っている私に職員さんが、残念なように「先に前に進んでいいよ」と言われました。その時、車イスの方は淋しそうな表情に思えました。私は、その時になってもっと自分の立場だけのことを考えず、車イスの方はどうすれば良かったのか、前もって考えてあげれば良かったと心が痛みました。この経験から、私は車イスの方の気持ちを察する大事なことを学び、車イスというハンディのことを学んだ気がします。自分と少し違う立場の時を考えたらもっと共感することができてくると思いました。おもしろい時は一緒に笑い、楽しい時はみんなで盛り上がりました。ただ、相手のハンディを考え、もっと楽しくなるにはと考えながら気を使ってあげることで、もっともっといいものができてくると思います。「大きくなーれ　友達の輪」で、学んだことを生かし、「受容と共感」を大きくしていきたいと思いました。

この感想から、いくつもの意義を見出すことができる。

「やってよかった」との充実感を体験する。これは文章全体から感じることができる。特に福祉専門職としてのアイデンティティ形成につながる願望が語られているところにこれを読み取ることができる。すなわち「受容と共感」を大きくしていきたい、と述べられているところである。「大きくしていきたい」との表現に本人の本当が感じられる。体験が新しい認識を生んでいることが分かる。一緒に笑うこと、楽しむことで「友達の輪」が広がることを発見している。また、反省も見られる。フォークダンスのときの一連の出来事の記述に反省が読み取れる。さらに、障害者に対する理解を深めていることも読み取れる。どういう場面で生き生きしているのか、淋しいのか、これらについて理解したことが窺える。

以上、少なくともこの感想から、充実感の体験、福祉職としての職業意識形成につながる願望、新しい認識の発見、障害者に対する理解の深まりがよみとれる。

②充実感の体験

このイベントの最大の意義は交流自身を楽しむことにある。これが充実感につながると思われる。充実感の体験を裏付ける記述はいたるところに見られる。「楽しかった」「よかった」「嬉しかった」との記述がいたるところに見られる。一つだけあげる。「印象に残った事は、みんなでダンスをした事です。１人１人の手をとり、相手の顔を見ながら踊るのがすごく楽しかったです。障害者の方がすごく笑っていたので私までつられて笑ったりしました。」もう一つ。「ダンスやフォークダンスの時に片腕のない方と踊りました。私はその方のもう片方の腕をしっかりと握っていたら、その方も握り返してくれてニコニコ笑いながらしてくださり私も嬉しくなりました。」これは、まさに障害者との交流を楽しみ、充実を体験しているといえる。

③福祉職としての職業意識形成につながる思い

障害者との交流に充実を体験することも、福祉職としての職業意識の形成につながることと思われる。これに加えてより、具体的な記述も見られる。一つだけ例示する。「去年も今年も昼食会場作りに一番時間がかかったと思います。暗くなるまで残ってペーパーフラワーを飾ったり、文字を書いた画用紙を貼ったりと、みんなでわいわいできてとても楽しかったです。このような体験は、

施設に就職した時、行事などでとても役立つと思うので、私はこのようなイベントを二回も経験できて、とてもよかったと思いました」。こうした考えが、学生の心の中から自然に出てくるところに、このイベントの意義があると思われる。

④新しい認識の発見

一緒に楽しむこと、一緒に笑うこと、一緒に活動することが交流を促す、友情の輪を広げることに気づく学生が多い。また、主体的取り組みが充実感につながることを認識することもある。一つ例をあげる。「初めて会うもの同士で高校生などは少し緊張していたようだが、一緒にゲームやフォークダンスをしたことで自然と笑顔になっていた。自分たちでイベントの内容を考え準備をした分、充実感が大きかった」。

⑤障害者に対する理解の深化

障害者の真摯な態度に感動した記述が多く見られる。また、同じ位置に立つことで現れてくるものに気づいたことの記述もある。たとえば「障害者と同じ位置で握手をすることでふれ合いができた。」「障害者の方が一生懸命踊られている姿を見て、私も頑張ろうという気持ちになりました。」「踊りの時など会話をしている時に笑って返事をしてくださる方もいらっしゃいましたが、中には警戒されている感じであんまり話せない方もいらっしゃったので、そういう方とはもっとコミュニケーションを図りたかった」。障害者の当たり前の姿に触れ合うことができる、その姿から理解を深めることが続けられると思われる。

⑥先輩としてイベントを先導する意識の確立

1年生と2年生の役割が回を重ねるに従い、明確になってきている。2年生には、イベントを企画し先導する役割が多い。そうした中で生まれた意識を紹介する。イベントの「大成功の裏側には、特に2年生の存在が大きな柱として大事な役割を担っていたのだろう。来年は今年の考慮すべき点をしっかり踏まえ、来年なりのイベントを作ってほしいと思う」。「準備段階で私は、手話とダンスを教える係りをしました。1年生に一人で教えに行った時は緊張して、上手く教えることができませんでした。しかし、練習を重ねるうちに美しくそろうようになりました。ダンスも同じような感じでした」。また、2年生での取り組みを1年生の時と比較して、新しい認識を得ることもある。一つ例示したい。「今回は、自分たちですべて計画したのでとても大変でした。昨年は先輩方が考えられた事をこなすだけであまり関心がありませんでした。でも実際に自分たちがやってみると多くの人と協力し合う事の大切さ，難しさ，有難さがよくわかりました」。

⑦役割を果たすことに伴う充実感の体験

準備の段階から当日にわたって各自役割が与えられる。どの役割を選択するかは学生相互で決定していくことにしている。これを果たすことに伴う感情が記述されることが少なくない。記述される場合は肯定的感情がほとんどである。たとえば、「花アーチの係りをやって前日にたくさん花を作り組み立てるのが大変だったけど、当日に参加者の方々が私たちが協力して作った花アーチを通っている姿を見て、入場と退場の一瞬だったけどすごくやってよかったと思いました」。一方、役割を果たしたことを記述しながらも、心中の願いが語られることもある。一つ例示したい。「僕は放送機器の係りをしていたので、ステージ裏からイベントの様子を見ていました。障害者の方々や作業所から来られた方々はとてもパワフルで元気でした。僕も一緒にダンスやゲームをやりたかったなあ」。

⑧自己認識の深化

数は少ないが、イベントへの参加が自己の変化を気づかせる契機となる場合もある。一例をあげる。「障害者の方とダンスをしたり、バルーンアートをしたり、積極的に参加することができた。1年前の私ならば積極的に動くことができなかったと思う。これも、学校や実習等で色々なことを学び、障害者の方の事をもっと理解したいと思えるようになったからだと思う」。成長への気づきは学生に意欲を与えるものと思われる。

⑨イベントの内容そのものへの感動

これは佐賀北高等学校の吹奏楽部の演奏に触れた時の感動がほとんどである。一例をあげる。「交流会では、いろいろな出し物があってよかったが、一番心に残ったのは佐賀北高吹奏楽部による演奏だった。学生の私達も参加者の方も聞き入っていて私も感動し、鳥肌が立った」。この感動は、参加者全員のものであり、演奏した側にも感動を与えた充実が広がっているものと思われる。「演奏していて楽しかったです。終わった後、拍手ありがとうございます。」「普段できない体験をすることができとても楽しかったです」。これらは演奏した側の感想である。このような相互性こそこのイベントの核心の一つといえる。